思い出

「船頭町」子どもの頃の思い出

高司良恵
（会員　佐伯市宇山）

船頭町の商店〈八〉

(14) 大地酒造（大地千代子さんを訪ねて）

「大地酒造」

大地千代子さんを訪ねての四方山話の文中は「ちいちゃん」と呼ばせて書くことにしました。

小春日の日、同級生のちいちゃんを訪ねた。

家は船頭町横丁の池船橋の所の酒造跡・小賣店跡に住んでおられる。

声をかけると、ちいちゃんが出迎え居間に通された。もとのままの部屋をあちこち見廻しながら、幼い日々が浮かんでなつかしく、まず仏様を拝し天井を見上げ柱などを触って見た。

私は、ちいちゃん方の近くに住んでいたので、気安く遊びに行って本（講談社の本・単行本など）を読んだり、トランプ等をした事が、昨日の様に思い出され、時のたつのも忘れて、あれこれと四方山話に花が咲き、楽しいひとときを過ごすことができた。

船頭町には大地酒造・高野酒造があった。

大地酒造は池船橋の所、高野酒造は上本丁にあった。大地酒造は、ちいちゃんのおじいさん村治さんが主として経営し、「金龍」という焼酎を造っていた。

冬になると、杜氏が来て泊まり込んで酒造りをしていた。時折、杜氏さんの姿を見かけたが、白着を着ていた姿が印象に残っている。

ちいちゃんに、お酒の出来る過程を聞いてみた。

酒の源になる糀を作り、それをうむして冷やし液体を取る。次にコンクリートのタンクに入れて寝かす。

保存は甕に入れて保存する。ちいちゃんは頭を抱えながら、ざっと行程を話してくれた。
「ちょっと思い出せないなあ。」とつまってしまった。
「もう六十年以上前の事だからなあ。」と二人で笑った。
私は、道路の隅に筵を敷いて、籾殻にまぶされた酒の粕が干してあったのをよく見かけた。
あたりは酒の香りが漂っていたが糀の匂いが強かった。酒の粕を焼いて、黒砂糖を包み込んで食べると「美味しい」と言われていたが、子ども達にとっては関心が薄かった。
現在、ちいちゃんの方の家の中には、あまり大きくない当時の井戸が、そのまま残されている。

戦時下の企業統制、酒造について

戦時下、酒造関係の会社はひとつにまとめられた。ちいちゃんは、指を折り数えながら、大地酒造・高野酒造・小野富酒造・尺間嶽酒造、弥生の原田酒造、直川の小野酒造を一つにまとめ、南海酒造が誕生した。
船頭町には、小賣店が九軒あったと記憶していた。
ちいちゃんも、小賣店として店を開いて売いたが、時代の流れに致し方なく、伝統の小賣店もやむなく閉店してピリオドをうった。
現在、上本丁で大地酒造は受け継がれている。

船頭町思い出の三つのお話

(一) おつかい

飯台を囲んで家族が集まり揃っての夕食。父の前にはいつも、酒があった。
私は、「お酒っておいしいのかなあ」。父のにこやかな顔、夕食はにぎやかな話で一日の締めくくりであった。
浜丁に手広くお酒を扱っている小賣店「高橋商店」があった。お使いは母から「御通帳(おかよいちょう)」をもらって、高橋商店へお酒を取りに行くお使いだった。
店に着くと、おばちゃんがにこにこしながら、御通帳を受け取って書き込んでくれ、「ハイ！　お待ちどおさま」と言って、御通帳とお酒を手渡してくれ、「気を付けて帰りなさい」と店先まで出て見送ってくれた。
月末近くになると、「掛け取り」が来るからと母はつぶやいていた事が思い出される。お酒だけでなく御通帳は

何冊か台所に下げられていた。

お酒の好きだった父の顔、一家団欒の夕餉。贅沢な夕食では無かったが、母は親子七人家族、食べ盛りの子どもの食事を作ってくれた。白い割烹着を着た温かい母の姿が、今は切ない程偲ばれてくる。

(二) 馬糞は貴重なもの

青山・堅田方面から出る荷馬車は、池船橋を通って、船頭町の横丁、本丁を通る。

蹄の音が聞こえる頃は、商店街の一日が始まる。

先ず、自分の家の前の道路を掃いて水を撒くのが習慣になっていた。掃除が終わり一息つく頃荷馬車が通る。道路の真ん中くらいで立ち止まった馬は、遠慮無く大きな馬糞の山を残して立ち去る。町の中の珍風景。

排泄された糞からは湯気が立ち上る。馬は大きな息を吐き出すと知らぬ顔で行ってしまう。

しばらくすると、塵取りと箒でその馬糞を片づける。誰も文句や嫌味をいわない。かえって馬に愛着さえ感じる。馬糞は貴重な肥料となる。

船頭町の朝の風物詩。こんな風景見た方はありませんか。微笑ましい一風景でもあった。

(三) 親方さんと馬とお酒

船頭町には、九軒のお酒小賣店があった。

その中の一店、船頭町下本丁（現在脇田歯科医院）の角にあったお酒小賣店、松田商店には、青山・堅田方面から木炭、木材などを運搬していた荷馬車が一日の仕事を終え家路につく頃、立ち寄っていた。

松田のおばちゃんは、愛想良く親方さんを迎え、馴染みのお酒をコップ一杯注ぐ。受け取った親方さんは、ぐーと飲み干す。

一日の出来事や世間話に花が咲く楽しいひととき、おばちゃんは頷きながら聞いている。一杯が二杯と親方さんは上機嫌。やがて赤く染まった頬。

手綱を持つ頃は夕闇が近づいている。親方さんは荷馬車の後ろに乗って手綱を取る。頬かむりした親方さんはいい気分。馬は我が主をきちんと家まで運んで帰る。

家では、今か今かと家族が帰りを待ちわびている。

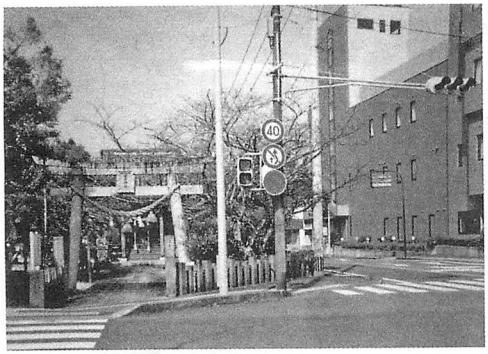
無事帰り着いた馬に、ねんごろな言葉をかけて労る家族荷馬車を片づけ、餌を与え拭いたり洗ったりして馬に感

謝する。

裸電球の鈍い明かりに、馬小屋は静かに眠りにつく。

終わりに

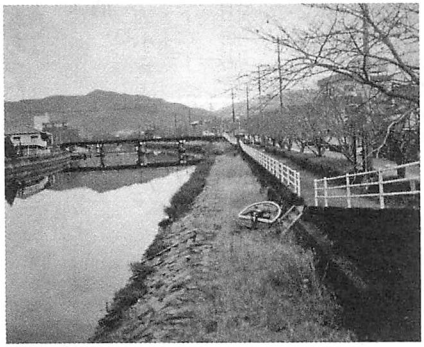
六十数年前の思い出は、ちょっと不安気味でペンを執るのにためらいました。何度も船頭町に出かけましたが尋ねる人もなくなり、わずかに残る古い町並みを立ち止まり立ち止まりして回想してみました。



大楠の所にあった住吉神社は、埋め立てた所に移された。昔の船着き場だった。

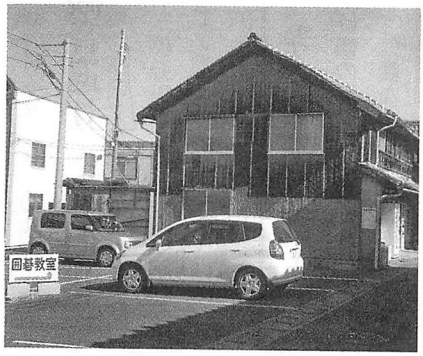
埋め立てられて、今は「ニュー佐伯」。
向こうの山は城山。
橋のそばの住吉神社内には、昔の常夜燈が残されている。

改修された番匠川。前方の山なみは、木立の元越山。
右の桜並木は城南中学校の通り。



上本丁にある現在の大地酒造
煉瓦の煙突に　心ひかれる。

浜丁入口　渡辺さん宅　駐車場はもとバス会社があった。（浦代・木立方面行き）



大地酒造に向きあう元西野精米所。
右側に池船方面に行く旧池船橋があった。現在「なかよしこばし」
昭和 62 年 11 月完成

同級生の大地千代子さんとお話が出来た事は、とても嬉しく思います。

賑わった船頭町の行事や、私たち小どもを育て守って下さった船頭町の人々に感謝でいっぱいです。

私の頭の中で走馬燈のように駆けめぐっています。昭和十四年頃から戦争にかけての思い出です。

「ふるさと春の訪れ」

番匠の　岸辺に築の　立ちて春
水門を　開きてまぶし　猫柳

良恵句